

〈基調報告 ②〉

「三沢市 “平畑(1)遺跡” の特徴について」

三沢市教育委員会 生涯学習課文化振興係 専任員 長尾 正義

1 はじめに

三沢市が、市の西部に位置する、いわゆる「平畑開拓」地区に計画したスポーツ施設建設に先立って試掘調査を実施しました。建設計画面積は540,000㎡で、「平畑(1)遺跡」～「平畑(5)遺跡」、「平畑(9)遺跡」の6遺跡が対象遺跡となり、試掘調査面積は約20,000㎡以上で、平成16年度から19年度までの4ヶ年にわたりました。このうち、「平畑(1)遺跡」の調査は平成17年度に約4,000㎡を調査しました。

2 遺跡の概要

「平畑(1)遺跡」は、JR東北本線三沢駅から北西に約3.4km、姉沼川に面した標高約30mの台地の南辺に位置しており、本遺跡は、これまで主に縄文時代後期の遺跡として知られていましたが、平成17年度の調査によって、奈良時代と平安時代が加わり、範囲も東側に大きく拡大いたしました。

試掘調査で検出した住居跡は、奈良時代1軒、平安時代11軒（2軒は確認のみ）で、他に平安時代の竪穴状遺構、土坑などを検出しました。平安時代の集落は、東西南北約100m四方の範囲に収まり重複はなく、縄文時代のものでは、前期初頭の早稲田6類式土器が出土する住居跡1軒を検出しています。

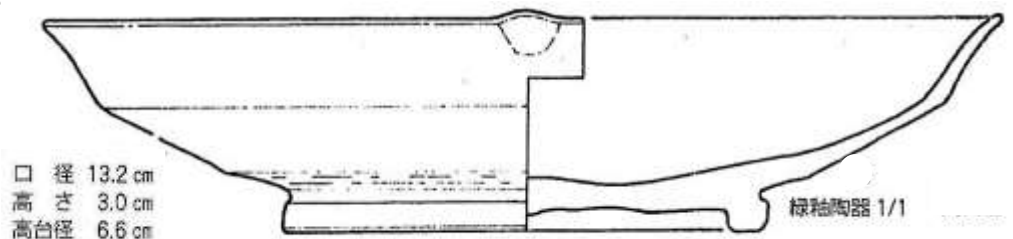
本遺跡周辺で平安時代の集落をいくつか確認していますが、西に隣接する「平畑(3)遺跡」とほぼ北側の「平畑(5)遺跡」からは、マウンドを伴う円形周溝墓を確認しており、その周溝内には10世紀初頭の十和田a火山灰、白頭山火山灰が堆積しています。また、「平畑(3)遺跡」の南西側突端部と「平畑(2)遺跡」の北東側突き出し部は濠で切られ、濠の内側で鉄製品や鉄滓を伴う10世紀後半と考えられる住居跡を多数確認しています。

3 緑釉陶器の出土状況

緑釉陶器は、「平畑(1)遺跡」において精査した40ヶ所余りのトレンチ（2×50m）のうち、No.38、No.41、No.42で確認した3軒の住居跡から出土しました。総数23点で、各住居跡の名称は、確認したトレンチNo.を付し、TR38HP、TR41HP、TR42HP3と呼称しました。住居跡ごとに出土状況等を記述してみました。

(図1～図4)

(図4)



TR38HP (図1)

東西8.6m×南北8mの大きさで、確認された住居跡の中では最大であります。覆土は自然堆積の状況を呈しており、十和田a火山灰と白頭山火山灰が層状に堆積しています。十和田a火山灰は床面から5cm程度の間隔で堆積し、かまどは北壁に2ヶ所あり、トンネル式の煙道を持ちます。東側の煙道は、崩落後に半地下式の煙道として再利用されております。

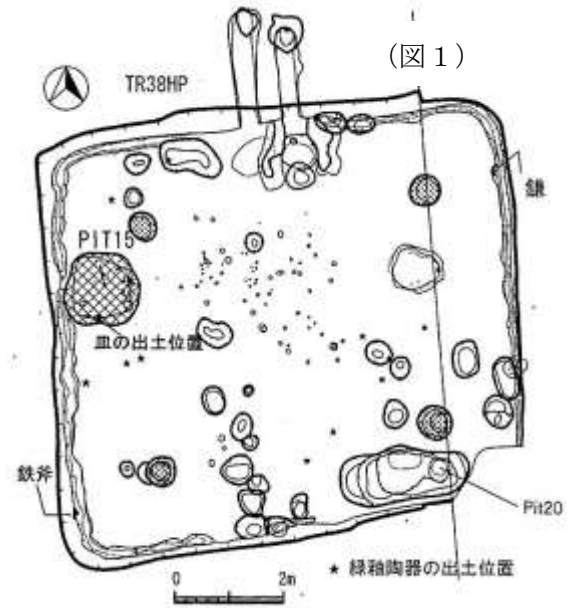
緑釉陶器は、住居内の土坑(Pit15)や床面から17点が出土し、最も大きな略完形の皿(図4)は、Pit15の覆土最上部から出土し、ピット内へ落ち込むような状態でありました。Pit15からは、他に緑釉陶器の破片2点、完形の土師器坏2点、刻書のある土師器坏1点、鉄製紡錘車1点が出土していて、この住居では、緑釉陶器の破片が床面上に散らばって出土していました。出土層位・遺構別に列挙しますと、3層、4層、5層から各1点、床面から7点、Pit20から1点、旧かまど脇土坑から2点となります。他に住居跡を覆う耕作土から1点出土していますが、TR38HP以外のものである可能性もあります。

住居跡に伴う他の主な遺物は、土師器坏が個体数にして20点以上、墨書のある土師器坏2点、土師器甕10個体以上、土師器耳皿1点、須恵器の長頸壺が1点、土錘1点、鉄製釘や用途不明の鉄製品10数点、炭化した木製皿2点などであり、多種多様な遺物が出土しています。

また、南壁近くの土坑内から炭化米と雑穀類が多数検出されました。三沢市内でこれまでも同時期の住居跡の調査をしていますが、少なくとも三沢市内ではこれほど多彩な遺物が出土した例はありません。

これらの遺物の中で目を引きますのが、土師器坏の多さと土師器甕の少なさであります。図示した土師器坏はロクロ成形で、完形もしくは1/2以上残存し、ほぼ9世紀末から10世紀初頭にかけての時期が想定されるものであります。

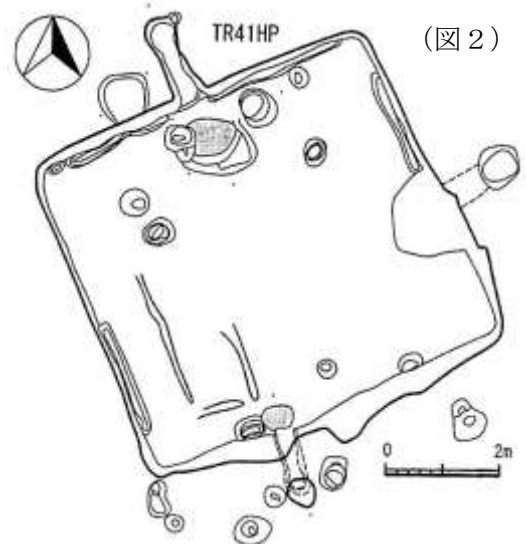
土師器甕では、器高15cm程度に復元できたものが、かまどの袖脇から1個体出土しています。



TR41HP (図2)

東西6.4m×南北6.5mの大きさですが、TR38HPから南西に約28m離れていて、覆土は人為堆積です。かまどは、北壁、南壁、東壁に1ヶ所ずつあり、東壁のかまどは袖が残存していたことから住居が放棄されるまで使われたものであると思われます。

いずれもトンネル式の煙道を持ち、遺物としては、土師器、須恵器、鉄製品(鉄鈴など)、石器、礫などが多く出土しています。緑釉陶器の破片は、覆土上部から4点が出土しています。人為堆積により、埋



まり切る前に緑釉陶器片が持ち込まれ、その後に十和田 a 火山灰が堆積した状況であったと思われます。

本住居跡から出土した緑釉陶器片 3 点は TR38HP の略完形の皿（図 4）に接合いたしました。他に、出土地点は不詳ながら、この住居跡に伴うものとみられる緑釉陶器の耳皿が 1 点確認されています。

TR42HP3（図 3）

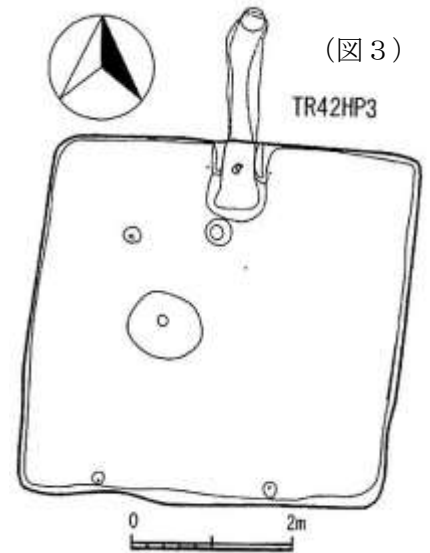
東西、南北とも約 4.5m の大きさであります。覆土は TR38HP から南西に約 53m、TR41HP から南西に約 25m 離れており、覆土は人為堆積であります。かまどは北壁に 1ヶ所あり、トンネル式の煙道を持ちます。かまどを覆う十和田 a 火山灰が含まれる層からは、緑釉陶器の破片 1 点が出土しています。この他に、土師器、木質部が残存する鉄製穂摘み具、炭化した櫛や雑穀が床面から出土しています。

最後に、緑釉陶器が出土した住居跡の時期についてまとめておきます。

緑釉陶器が出土した 3 軒の住居跡の堆積土には、915 年に降下したとされる十和田 a 火山灰がレンズ状に一つの層として堆積し、3 軒とも住居跡の中央付近で床面に接する状況でありました。9 世紀後半から 10 世紀初頭にかけて構築、居住、放棄されたものと考えられます。

また、TR38HP の床面あるいは土坑から出土したものと同一個体、もしくは同一個体と考えられる破片が、他の 2 軒の覆土中から出土いたしました。これらの緑釉陶器の出土状況から、3 軒の前後関係は、TR38HP が他の 2 軒よりも後に放棄されたことが把握できました。

（長尾正義）



4 緑釉陶器の産地と年代

緑釉陶器の産地と年代に関しては、研究者により幾分の判断のばらつきがあるかもしれませんが、以下では、高橋の私見（高橋 1995・2003b）をもとに、検討を加えてみます。

まずは、本遺跡出土の緑釉陶器の産地からみますと、東海の猿投窯産とみる意見もあったと聞いていますが、筆者の観察からしますと、削り出し高台の採用や、稜の弱い稜碗や稜皿の形態などから考えて、結論的に言えば、すべて平安京近郊窯（いわゆる畿内あるいは京都）産と判断できるものであります。

平安京近郊産のうち、さらに洛北・洛西・篠の各産地の製品を識別することは、通例では多くの場合において肉眼観察ではかなり難しいと考えられ、ただ、この時期に生産の主体になるのは洛西や篠であり、胎土や焼き上がりなどからみますと、本例は、ほとんどが篠窯のものともて問題がないものと考えられます。

篠と洛西の識別は、胎土の理化学的分析によって可能な場合があることが明らかになっている

ため（高橋編 2007）、今後、科学的に胎土分析を行えば、より確実な成果が得られるかもしれません。

次に、本遺跡出土の緑釉陶器の器種に関して改めて整理しますと、少なくとも稜皿が3点、稜椀が3点、小型椀1点、耳皿1点が存在したものと復元されます。もちろん、本遺跡の調査は部分的であるため、さらに多くの緑釉陶器がもたらされていた可能性は十分にあると考えられます。東日本の一遺跡から出土する平安京近郊産の緑釉陶器としても、器種のバラエティーに富む事例と評価できます。

今まとめたように、本遺跡出土の緑釉陶器の産地構成としては、いずれも平安京近郊（京都）産ということになり、数や器種としても比較的豊富であります。

ところが、東日本の遺跡では、むしろ東海産緑釉陶器の出土が多く、さらには東海産灰釉陶器の方が緑釉陶器よりも圧倒的に多いため、それと比べると本遺跡の状況はかなり特異なものであると考えられます。

陸奥などでは、東日本諸国に比べると、平安京近郊産の緑釉陶器の出土がやや多いようなので、それを積極的に評価すれば、そのような傾向が本例ではさらに増幅していることとなります。

本事例に関する限りで言えば、東北地方あるいは東日本全般に流通していた緑釉陶器がもたらされたというよりも、平安京などとのより直接的なつながりを持つなんらかのルートを通して、緑釉陶器が一括して流入したことを考慮する必要があると考えられます。

今後、青森県の他の例と比較していくことにより、この地域としては一般的なことなのか、本遺跡の特異な現象なのかが判明するはずです。

続いて、これらの緑釉陶器の年代観をみていきますと、この時期の緑釉陶器の編年としては、各氏が見解を提出していますが、ここでは筆者の試案をもとに考えていくことにします（高橋 2003 a・b、高橋編 2007）。

本資料の産地とみられる京都府亀岡市の篠窯跡群では、近年大阪大学が調査した大谷3号窯（大阪大学 2006、高橋編 2007）を加えますと、基準となる窯跡出土品により、大谷3号窯→前山2・3号窯→黒岩1号窯という変遷を追うことができます。これに当てはめつつ、以下に検討します。

まず最も残存状況の良い略完形皿について見てみますと、先述の繰り返しにはなるものの、年代的位置付けを考える上では、以下のような特徴が抽出できます。

a. 稜皿である点、b. 法量が 13.5cm ほどである点、c. 口縁端部に輪花を施している点、d. 器壁が非常に薄い点、e. 底部外面に緑釉を施さない部分施釉である点、f. ほとんどミガキが施されず、ナデが多く残っている点、g. 削り出し輪高台ながら削りが粗い点、などが挙げられます。

平安京近郊窯の製品では、aに挙げたように緑釉陶器の稜椀や稜皿が出現するのは、おおむね大谷3号（洛北の妙満寺）窯段階であります。それより前の時期では基本的に稜のない椀皿類であるため、本資料も大谷3号窯段階以降の製品と判別できると考えます。

…時代が下がるにつれて、緑釉陶器の皿の法量の縮小化傾向が迫れますが、本品はおおむね13～14cmであることから、前山2・3号窯段階に相当します。ちなみに、黒岩1号窯跡段階では、さらに口径が縮小し、稜の位置も体部の中位に下がっていくので、本資料はやはり前山2・3号窯のものと酷似しています。

…大谷3号窯段階ではほとんど輪花がなく、おそらく稜皿と輪花皿が別の器種として分化しているのに対して、本品は体部に稜がありつつ口縁にも輪花があることから、前山2・3号窯段階の特徴と一致します。黒岩1号窯段階では輪花が衰退化傾向を辿り、前山2・3号窯が輪花の盛行期であることから、本資料は前山2・3号窯の段階とみられます。

…大谷3号窯では薄いところでも4～5mm程度の通例のものであるのに対して、前山2・3号窯では非常に薄くなって、2mm以下のものなどが確認でき、黒岩1号窯では再び厚くなります。この点でも、本資料は前山2・3号窯段階の製品にふさわしいと考えます。

…大谷3号窯段階では、基本的に底部外面にも施釉するのに対して、前山2・3号窯では底部外面の施釉が省略されていきます。高台の削り出しや器表面のミガキも、大谷3号窯では比較的入念ですが、時代が新しくなるにつれて粗くなる傾向があり、前山2・3号窯段階とみて矛盾はないと考えられます。「平畑(1)遺跡」の緑釉陶器の略完形皿は、上記のような点からすると、典型的な前山2・3号窯段階に比定することができると考えられます。…

本遺跡出土の緑釉陶器は、前山2・3号窯が中心で、一部はその直前段階頃のものを含むものと判断されます。前山2・3号窯の暦年代観は、論者によって差がありますが、従来には、10世紀第2四半期を中心に考えられてきましたが、近年は9世紀後半に上げる見解も提出されています。

これまでの資料のうち、確実な実年代の定点になると考えられますのが、平安宮西限隍23の出土例であります。西限隍23の出土資料は、文献史料との対応から、延喜10年(910)から天慶2年(939)頃までに投棄されたものと推測されています。ただ、この資料では前山2・3号窯が10世紀第1四半期にまで遡るかは、厳密には判別できません。

…本遺跡出土緑釉陶器は、火山灰からみて明らかに十和田a火山灰の降下以前ということになります。もちろん供給と廃棄の時間幅を考えるべきですが、少なくとも十和田a火山灰降下の915年以前に、前山2・3号窯段階の緑釉陶器生産が開始されていたことが裏付けられることになります。平安京などでもなかなか良好な資料がない中で、本遺跡出土品は前山2・3号窯段階の緑釉陶器の存続時期の一端を示す、非常に貴重な資料群として評価できることになります。従来の検討を含めれば、篠の前山2・3段階はほぼ10世紀前半で、10世紀初め頃に遡ることが確実になったものと判断できます。

(高橋照彦)

5 緑釉陶器出土の背景

平安時代の緑釉陶器は、これまで平安京をはじめとして全国各地で出土しています。ただ、これまで確認されていた平安期緑釉陶器は、いずれもほぼ日本の古代律令国家における国郡の設置範囲内で出土していました。ところが、近年になり、青森県の平安時代併行の遺跡から、施釉陶器の出土が確認されるようになってきました。これまでの分布範囲に関する暗黙の想定を覆すものであろうと考えられます。…

これまでの東北地方における調査においては、多賀城、胆沢城を初めとする官衙関連の遺跡ならびに、その周辺遺跡や寺院跡などから出土するのが通常でありました。また、緑釉陶器は庶民が使用する一般的な土師器とは異なり釉薬が施される、いわゆる高級食器の部類に入るものでもあるため、地方においては都から派遣された官人、あるいは、いわゆる在地でも富裕層などが所持し、使用するものであると一般に考えられます。…

本遺跡においては、緑釉陶器とともに須恵器壺が出土していますが、胴部下半の回転ヘラ削りからみて、既に操業を開始していたかとみられる津軽の五所川原窯の須恵器ではありません。しかも太平洋岸などの製品でもない指摘する研究者もいます。

詳細は、今後に報告の予定ながら、三辻利一氏による胎土分析では、この須恵器壺が「山海窯群？」とされており、本遺跡の他の住居から出土した須恵器2点については、三辻氏によれば「山海窯群の製品と推定できる」と指摘されています。

出羽経由の須恵器が存在した可能性も考えておかねばならないと考えます。また一方で、「平畑(5)遺跡」からは、出羽系の土師器甕の破片が表面採集されており、これらの点からしますと、陸奥側だけでなく、出羽側からの物資の流入も考えられると推測されます。いずれにしても、青森県より南の地域との文物のやり取りの中で、緑釉陶器が流入する必然性は十分に認めることができます。

八戸地域で見ると、9世紀後半から10世紀前半に、集落の竪穴住居数が著しく増加する点が指摘されており（宇部 2007）、その北に隣接する本遺跡も、この地域全体の隆盛の中で、平安京周辺の文物を入手できるような力を蓄える人物が出てきたことを示すものであろうと考えます。

その点では、前述した「平畑(3)遺跡」、「平畑(5)遺跡」から発見されている円形周溝墓との関連なども、おそらく視野に入れて考えなくてはならない問題であると考えます。

このうちの「平畑(3)遺跡」の円形周溝墓はマウンドが残っており、十和田 a 火山灰が降下後、白頭山火山灰の降下前に構築されたものであります。マウンドになる範囲に、十和田 a 火山灰を敷き詰めた状況で検出された点が特徴的であり、十和田 a 火山灰降下の直後に築造されたのであろうと考えます。「平畑(5)遺跡」の円形周溝墓にもマウンドが残っており、周溝には十和田 a と白頭山の両火山灰が自然堆積しており、「平畑(3)遺跡」よりも古い円形周溝墓であることがわかります。「平畑(5)遺跡」は緑釉陶器が出土した「平畑(1)遺跡」と直線距離で1 kmほど離れていますが、時期的にも近く、十分に関連があるものと推測されます。

本遺跡の緑釉陶器が出土した竪穴住居は、突出した規模や構造をもつものではありませんが、その出土遺物としてはかなり豊富なものであります。9世紀後半にはエミシに「富饒酋豪」(『日本三代実録』貞観十五年(873)十二月二十三日条)が存在したことが文献史料からも知られますが、少なくとも円形周溝墓を築くような有力層が、入手の担い手であったことは指摘できます。

その入手の契機は、もちろん様々な想定が可能であり、現状で推測するのは難しいと考えられます。

…陸奥の国府や鎮守府には、東海産緑釉陶器が目立ち、平安京では圧倒的に平安京近郊窯産の緑釉陶器が多いということからすれば、国府や鎮守府を介した饗給という形よりも、より平安京と結び付きのある人物からの入手を考えた方がよいのかもしれませんが、それは、饗給が10世紀初頭ないし前半にはその役割を終えるという指摘(鈴木1998)とも対応する事態とも言えるでしょうか。

…王臣家などと私交易を行う者や、あるいは入京した者もいたのかもしれませんが、さらにそのようなエミシとの再交換なども含め、平安京周辺産の緑釉陶器を入手する過程が生まれたものと推測されます。

北奥は様々な史料にもみえるように良馬の供給地として知られており、その他にも多くの特産物があることから、おそらくそれらが交易の対象になっていたはずであります。

本遺跡の所在する地域は、10世紀代における擦文土器の南限であり(宇部2007)、平畑(5)遺跡でも擦文土器が出土していることから、北海道からの文物を入手し、それを南へと橋渡しする境界域としての役割を担う人物もいたであらうでしょう。北奥の特産物や北海道からの交易品を陸奥国あるいは出羽国などへともたらし、円形周溝墓を築いたようなエミシの有力層が、緑釉陶器を入手する機会を得たものと判断しておきたいと思えます。

6 おわりに

…青森県内の遺跡では、鍵となる火山灰降下層の検出により、平安時代の考古学研究に寄与する部分も少なくありません。

…平安京ですら、実年代の特定が困難な状況にある緑釉陶器に関して、産地から遠く離れた北の地の一つの住居跡において年代の一端を押さえることができるのは、その点の好例と言えます。

今後、平安時代研究において青森県地域の動向には目が離せないと言って間違いなく、そのための青森からの情報発信が一層望まれるであろうと考えます。…